

# 定位家族構造・きょうだい構成に関する基礎的分析

— 「家族についてのアンケート」データの概観を通して—

苦米地 なつ帆

本稿では「家族についてのアンケート」データを用いて、データ内の家族・きょうだいの構造や家族背景について概観し、それらと子どもの学歴との関連について基礎的な分析を行った。

クロス集計により得られた結果から、子どもの多い家族では一人当たりに配分される経済的資源が希釈されて少なくなっていることや、中学生時に受ける教育投資においては男女差がみられないことが明らかとなった。さらに、前のきょうだいとの出生間隔が近い子どもは親からの教育投資を受けにくい不利な状況にあると考えられる。また、一人っ子ときょうだいがいる人を比べると、きょうだいがいる場合に国公立大学卒の比率が高いことが明らかとなり、「国公立か私立か」という進路選択のメカニズムにきょうだい構成が影響を与えている可能性が示唆された。

**キーワード：家族構造、きょうだい構成、インターネット調査**

## 1 はじめに

本稿の目的は、筆者が2014年4月に実施した「家族についてのアンケート」を用いて、データに含まれている家族・きょうだいの構造や家族背景について概観するとともに、それらと子どもの学歴との関連について基礎分析および考察を行うことである。

これまでも階層研究や家族研究の文脈の中で、家族構造やきょうだい構成と個人の地位達成の関連を検討した研究は数多く存在する (Blau & Duncan 1967; Sewell et al. 1970; Kuo & Hauser 1995)。日本の量的データを用いた実証研究に限ってみても、1970年代から現在に至るまで着々と研究が蓄積されてきた (安田1971; 近藤1996; 平沢・片瀬2008)。だが、同じ家族背景をもつ子どもを比較すること、すなわちきょうだい内での地位達成の差異あるいは類似性を検討した研究はそれほど多くはない<sup>(1)</sup>。その理由として、同じ定位家族に属する子どもの情報が得られるデータが少ないことが挙げられる。全国規模の社会調査の中では、全国家族調査(NFRJ)のデータをきょうだいデータ(=同じ家族に属する複数の子どもの情報を得られるデータ)として分析に用いることができるが、それ以外にはきょうだいデータとして利用できるデータはほぼないのが現状である。また、既存研究の中には子どもの地位達成に影響を与えうるものとして、きょうだい構成やきょうだい関係

を挙げる研究が散見されるが、それらの影響を計量的なアプローチで検討した研究は蓄積が少ない。

上述のように、きょうだい構成やきょうだい関係と地位達成の関連についての検討がなされてこなかった背景には、きょうだい構成やきょうだい関係について把握できるデータが少なかったことがある。そこで筆者は、インターネットを利用して「家族についてのアンケート」を実施した<sup>(2)</sup>。データについては次章で詳しく説明するが、このデータを用いることで、これまで繰り返し確認されてきたきょうだい内での格差、例えば出生順位によって教育達成が異なることや性別によって親の教育期待が異なることが「なぜ」起こっているのかという問いにアプローチすることが可能になる。本稿では多変量解析を用いた詳細な分析の前段階として、まずデータの中にどのような家族がいて、どのようなきょうだい構成の子どもがいるのかを把握していく。

## 2 データと方法

本稿で使用するの、「家族についてのアンケート」によって得られた調査データである。本調査はインターネット調査で、2014年4月に実施された<sup>(3)</sup>。同じ家族内の子どもの比較が可能なデータ、すなわちきょうだいデータを得るためには、父親や母親にあたる人に子どもについて回答してもらうかきょうだい員全員に調査を実施する必要があるが、「家族についてのアンケート」では前者の方法を採用してデータ収集を行った。調査対象となるのは24歳以上の末子がいる女性である。インターネット調査モニターに登録している女性に対して子どもの年齢を尋ねて対象者を絞ったうえで、無作為抽出によって調査票を配信した。調査票の配信開始日は4月16日、回答の回収終了日は4月18日、1995サンプルからの回答を得た(図1)。調査母集団がインターネット調査モニターに登録している人であることは留意すべき点である<sup>(4)</sup>。

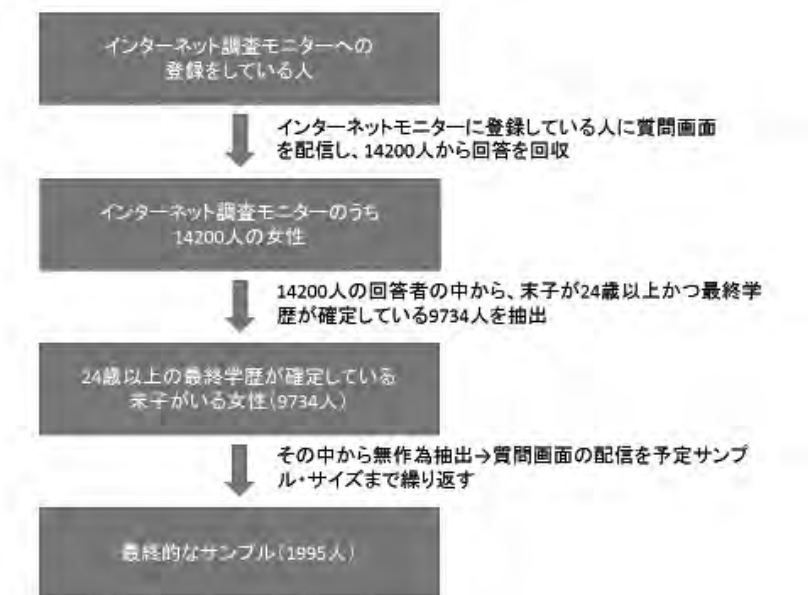


図1 「家族についてのアンケート」におけるサンプル抽出の流れ

「家族についてのアンケート」の特徴は、既存の量的な社会調査データではとらえられていなかった親子関係やきょうだい関係に関する項目を多く含んでいることである。含まれている質問項目は大きく5つに分類される。1つ目は母親の情報、2つ目は父親の情報、3つ目は子どもに関する情報、4つ目は母親と子どもの関係に関する情報、そして最後に子どもたち同士の関係に関する情報である。具体的な質問項目については、表1を参照されたい。

分類	質問項目
回答者自身(母親)に関する項目	年齢、現在の居住地、現在の職業、配偶者の有無、子どもの数、子どもが中学生時の職業、子どもに対する教育期待(中学生時)
配偶者(父親)に関する項目	年齢、学歴、子どもが中学生時の世帯年収
子ども(きょうだい)に関する項目	性別、年齢、学歴、高校生の頃の居住地、最終学歴獲得時の居住地、初職、中学時の成績、中学生時の教育投資額
回答者と子どもの関わりに関する項目	子どもが中学生時の日常生活や対人関係についての相談経験、子どもが中学生時の進路についての相談経験
子ども(きょうだい)同士の関わりに関する項目	小学生時の教育経験・外出経験・けんか経験・無視経験、高校生時の学校体験会話経験・進路に関する会話経験

表1 質問項目概要

本稿では、表1に示してある質問項目の中でも定位家族に関する項目である母親・父親の項目と子どもに関する項目について度数分布表やクロス集計表をもとにグラフを作成し、データを概観する。

### 3 分析結果

#### 3-1 定位家族・きょうだいの構造

まず、定位家族に関する情報についてまとめていく。

回答者すなわち母親にあたる女性の年齢は44歳から80歳、平均は60.3歳であった。また、調査時点における回答者の配偶状況を表2に示した。父親・母親ともにそろっている二人親家庭が全体の81.2%を占め、10.9%が離別母子家庭、7.7%が死別母子家庭、0.2%が未婚の母子家庭となっている。母子家庭が全体の18.8%となっており比較的高い数値であるが、回答者が中年層から高齢層に偏っていて離別や死別を経験している可能性が高いためではないかと考えられる。なお、調査時点で配偶者がいる場合に限定されてしまうが、配偶者すなわち父親にあたる男性の年齢幅は34歳から89歳で、平均が61.9歳であった。

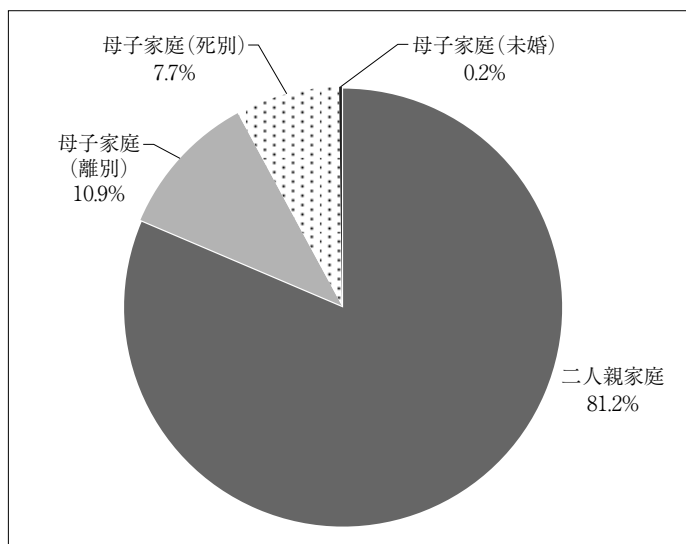


図2 回答者の配偶状況 (N=1995<sup>(5)</sup>, 数値は%)

続いて、回答者(母親)および配偶者(父親)の学歴の分布を表2に示した。最終学歴が高等教育機関であるかどうかで分けた場合には、母親のうち53.8%、父親のうち61.3%が高等教育機関を卒業している。

母親と父親の学歴をそれぞれ教育年数に換算して相関係数を算出したところ、相関係数は0.52となり、比較的強い相関があることもわかった。

表2 回答者(母親)および配偶者(父親)の学歴分布 (%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とまらない場合がある。)

回答者(母親)学歴 (%)		配偶者(父親)学歴 (%)	
中学校・高等学校	43.8	中学校・高等学校	35.3
高等専門学校	2.4	高等専門学校	3.3
専門学校	10.5	専門学校	6.5
短期大学	20.8	短期大学	2.3
大学(四・六年制)	21.8	大学(四・六年制)	48.3
大学院	0.8	大学院	4.2
その他	0.1	その他	0.1
計	100.0	計	100.0
	(N=1995)		(N=1620)

ここからは子どもの情報についてまとめていく。初めに、子どもの数(きょうだい数)は図3のように分布している。

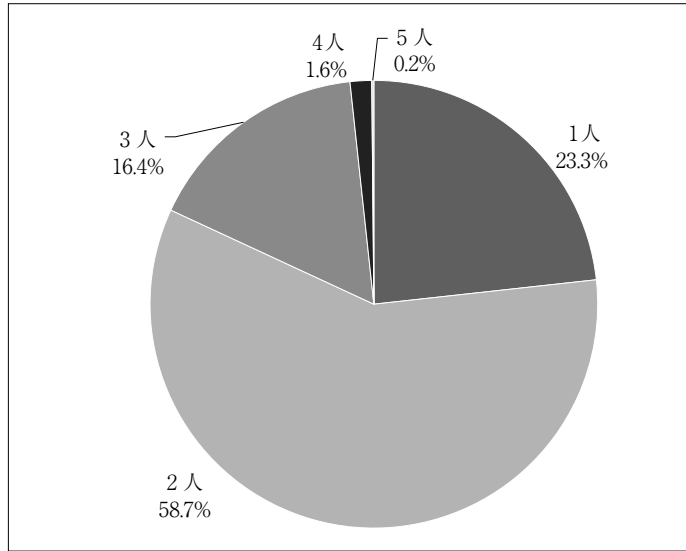


図3 回答者の子どもの数(きょうだい数) (N=1995, 数値は%)  
 (小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある)

前述したように「家族についてのアンケート」回答者の末子年齢は24歳以上であり、調査時点から追加出生が起こることはほぼないと考えられる。したがって、きょうだい構成が確定しているとみなしてよいだろう。最も多いのは2人きょうだいで、全体の約6割を占めていた。「家族についてのアンケート」と同じようにきょうだい構成がわかるNFRJ03データにおいては<sup>6)</sup>一人っ子が5.5%、2人きょうだいが52.4%、3人きょうだいが36.1%、4人以上のきょうだいが6.0%の比率となっている(保田2009)。図3とNFRJデータにおける状況をふまえると、「家族についてのアンケート」データにおいては一人っ子が多く、その分3人以上のきょうだいが少ないということがわかる。このような分布になる理由は今後さらに詳しくデータを確認していく必要があるが、インターネット調査モニターに登録している母親が、比較的子どもが少なく経済的にも余裕がある母親なのではないかと推測される。したがって、可能な限り偏りを補正したうえで多変量解析を行うことが望ましいと考えられる。

次に出生順位の分布は図4のようにになっている。必然的に第1子である一人っ子もあわせると、「家族についてのアンケート」データ内の約半数は第1子である。なお、一人っ子を除いた場合の出生順位の分布は、第1子が44.3%、第2子が44.3%、第3子が10.4%、第4子が1.0%、第5子が0.1%となっている。

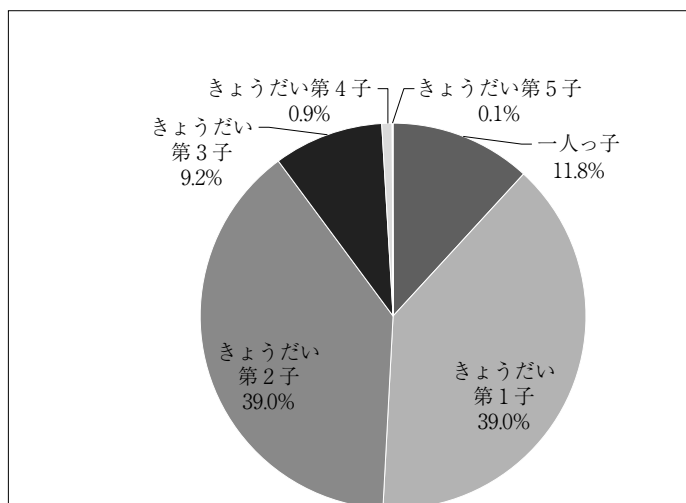


図4 出生順位の分布(一人っ子ときょうだいがいる場合を区別)(n=3924, 数値は%)  
 (小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある)

また、きょうだい構成要素の1つとして挙げられる出生間隔については以下の図5のような分布となっている。なお図5では、第2子ならば第1子との出生間隔、第3子ならば第2子との出生間隔というように、直近の年上きょうだいとの出生間隔をみている(一人っ子ときょうだいの第1子は除外してある)。出生間隔が0年のケースがわずかにみられるが、双生児や年子のケースがここに表れていると考えられる。直近の年上きょうだいとの出生間隔の平均値は2.9年であった。それと分布をあわせてみると、子どもの多くは、先に生まれたきょうだいから2年から4年ほどの間隔をあけて誕生しているということがわかる。

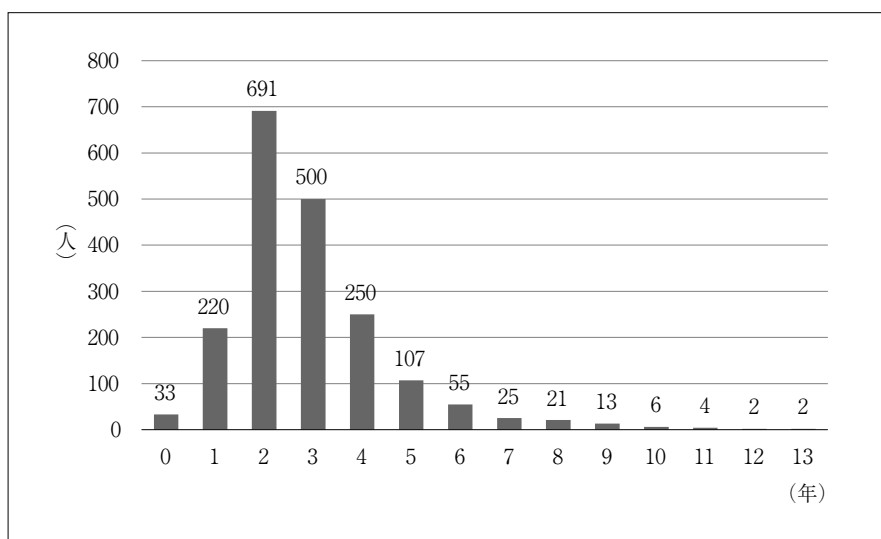


図5 直近の年上きょうだいとの出生間隔の分布(n=1929, 数値は実数)

続いて、きょうだいの性別構成の分布を確認してみよう。「家族についてのアンケート」データ内の子どもの男女比率は、男性が2030人で51.7%、女性が1894人で48.3%となっている。

また、一人っ子の男女比率は、男性が240人で51.7%、女性が224人で48.3%であった。そして、2人きょうだいの性別構成は以下に示すとおりである。2人きょうだいの組み合わせは全部で4通りあり、男性・男性(兄・弟)の組み合わせが26%、男性・女性(兄・妹)の組み合わせが26%、女性・男性(姉・弟)の組み合わせが25%、そして女性・女性(姉・妹)の組み合わせが23%であった。すなわち、いずれか1つの組み合わせのきょうだいが多いということはなくほぼ均等に分布しているといえるだろう。

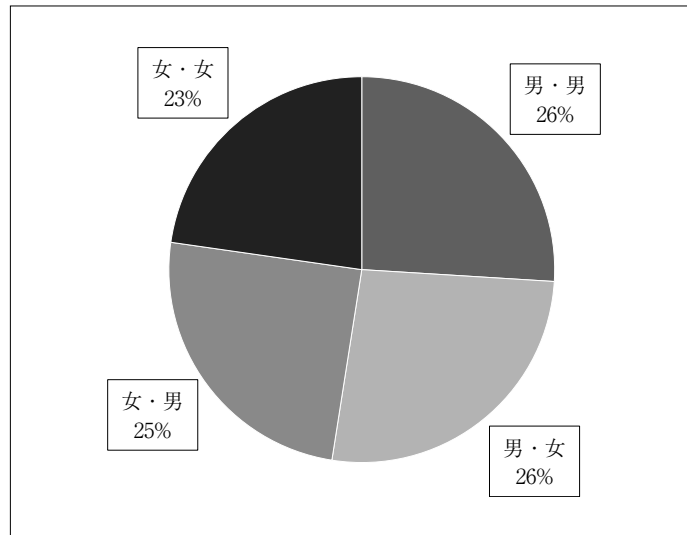


図6 2人きょうだいの性別構成 (N=1170)

3人きょうだいの性別構成は図7のとおりであった。3人きょうだいの組み合わせは8通りある。すべて男性やすべて女性という組み合わせが全体の28%、男女が混在している組み合わせが72%を占めていた。図7から明らかなように、2人きょうだいの場合と同様に8通りの組み合わせがほぼ均等に出現しているといえるだろう。

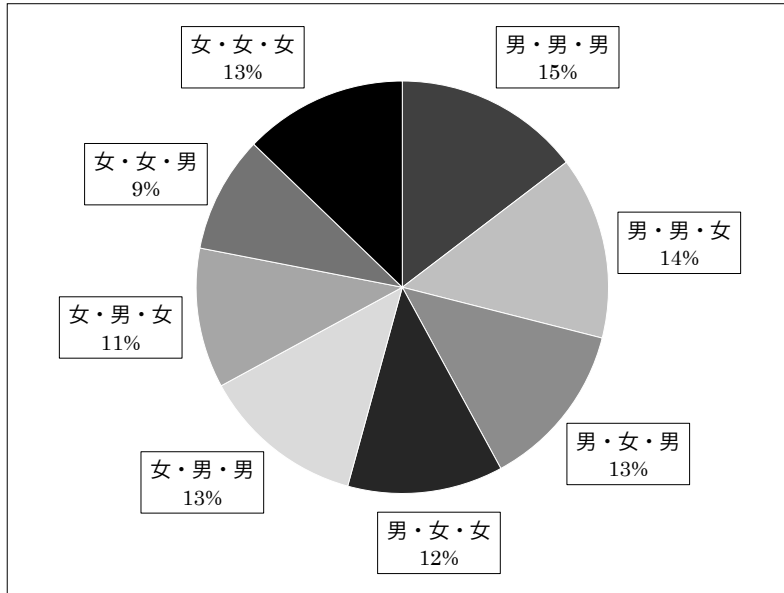


図7 3人きょうだいの性別構成 (N=327)

4人きょうだいと5人きょうだいについてはケース数が少ないため、表5・6に示した。4人きょうだいの中で最もケース数が多かったのは男性・男性・男性・女性という組み合わせと、女性・女性・男性・女性という組み合わせであった。5人きょう代いは組み合わせが32通りあるが、データから確認された組み合わせのみを掲載している。5人きょう代いの場合には男性ばかり・女性ばかりというケースはみられず、いずれも男女が混在するきょうだい構成となっていた。

表5 4人きょうだいの性別構成 (N=31)

構成	ケース数	構成	ケース数	構成	ケース数	構成	ケース数
男・男・男・男	2	男・女・男・男	2	女・男・男・男	2	女・女・男・男	1
男・男・男・女	4	男・女・男・女	2	女・男・男・女	2	女・女・男・女	4
男・男・女・男	0	男・女・女・男	3	女・男・女・男	1	女・女・女・男	1
男・男・女・女	3	男・女・女・女	0	女・男・女・女	1	女・女・女・女	3

表6 5人きょうだいの性別構成 (N=3)

構成	ケース数
男・女・男・女・男	1
女・男・男・女・女	1
女・女・男・男・男	1



### 3-2 定位家族の経済的資源ときょうだい構成の関連

本節では、定位家族の経済的資源量ときょうだい構造の関連についてみていく。

まず、「きょうだいがいるか一人っ子か」ということと中学生時の世帯年収の関連を示したのが図8である。きょうだいがいる場合の方が、年収の分布がやや右寄りすなわち高い方に多く分布していることがみてとれるだろう。子どもがいる場合には子育てにお金がかかり、子どもが多くなればなるほど必要になるお金が増えることから考えると、世帯年収が低い世帯ではそもそも複数の子どもをもつのが難しいため、このような分布の違いがみられるのではないかと考えられる。同時に、一人っ子でも年収が高い層が存在していることから、金銭的な余裕があっても追加的に子どもをもうけずに、一人の子どもを手厚く育てるような世帯も多く存在していることがわかる。

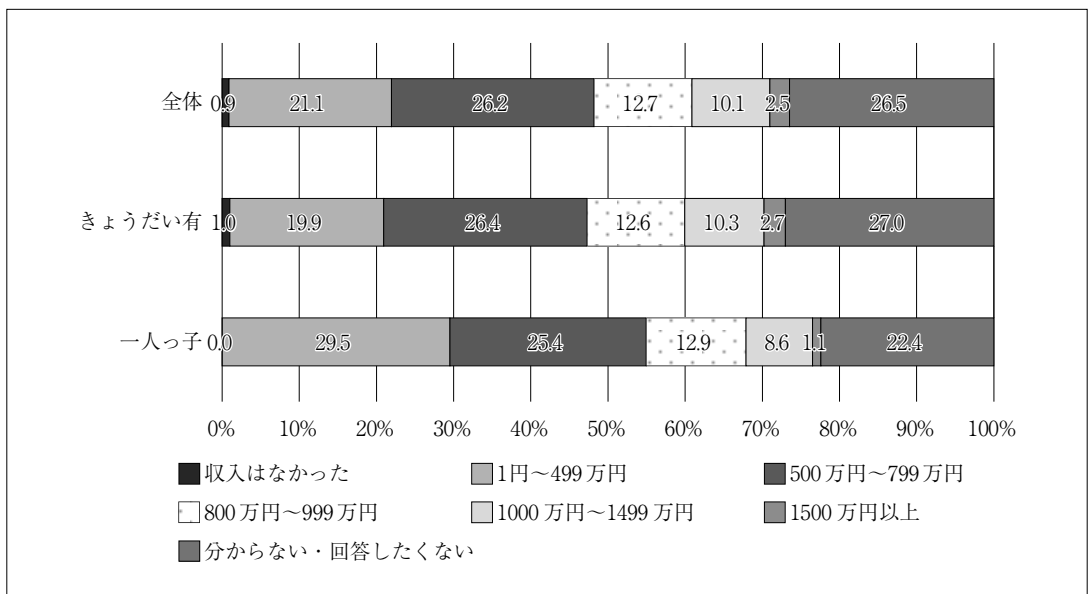


図8 中学生時の世帯年収の分布 (n=3924, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とまらない場合がある。)

続いて、きょうだいがいる場合に絞って出生順位と世帯年収との関連を示したのが図9である。なお、第4子・第5子はケース数が少ないため、第3子とまとめて「第3子以降」とした。この図より、出生順位による中学生時の世帯年収の差はほとんどないことがわかる。ただ、第3子以降になるとわずかながら世帯年収が高年収の層の比率が増加している。このことから、第1子が中学生になってから第3子以降が中学生になるまでの期間で、父親の年収の上昇や母親の労働市場への参入を通して世帯年収が増加しているのではないかと考えられる。

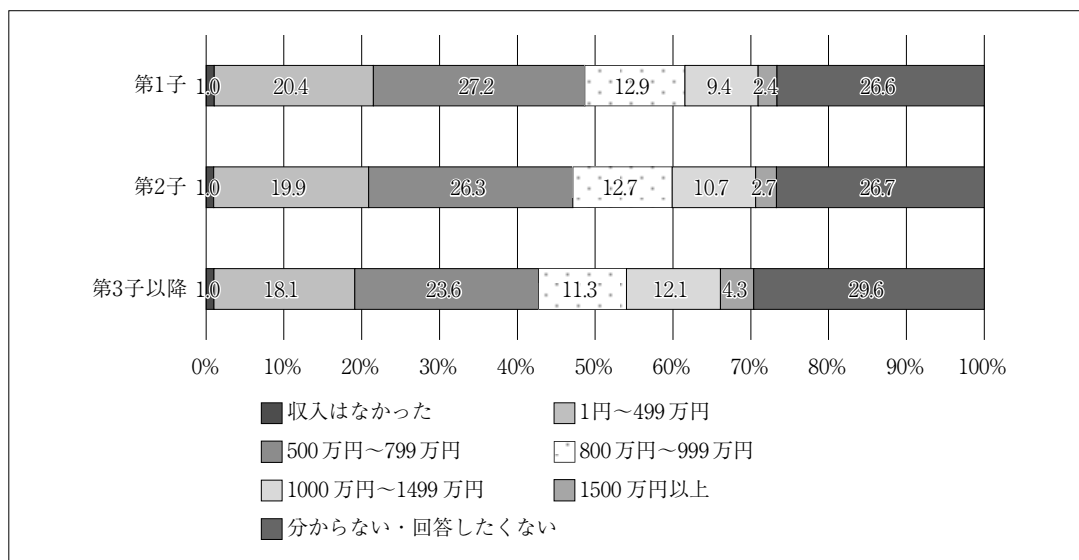


図9 出生順位別にみた世帯年収の分布 (n=3924, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とまらない場合がある。)

以下ではきょうだい構成と子どもが中学生時の教育投資額との関連を検討していく。ここで使用する中学生時の教育投資とは、「それぞれのお子さんが中学生のとき、塾や予備校、家庭教師、通信添削に支払った費用は毎月平均的にどの程度でしたか」という質問文に対する回答である。なお、回答は具体的な金額を答えてもらう形式ではなく、0円から5万円以上まで1万円刻みのカテゴリ形式となっている。初めに、子どもが中学生時の教育投資額の分布を表7に示した。中学生時に教育投資を受けていた子どもは全体の約7割、受けていない子どもが約3割であった。また、図10に示すとおり、教育投資を受けている子どもの中では3万円未満までに分布が集中していることもわかる。文部科学省が平成14年度から実施している「子供の学習費調査」の平成14年度データによると<sup>(7)</sup>、子ども補助学習費(家庭教師・塾・その他)の月額平均は、公立中学校で約18000円、私立中学校で約15000円であり、両者を合わせた平均は約17000円である。このことともあわせておおよそ2万円前後が平均的な教育投資金額であると考えられる。

表7 中学生時の教育投資額の分布 (n=3924, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とまらない場合がある。)

中学生時教育投資額 (%)	
0円	31.1
～1万円未満	27.1
1万円以上～2万円未満	20.4
2万円以上～3万円未満	11.5
3万円以上～4万円未満	4.0
4万円以上～5万円未満	2.4
5万円以上	3.5
計	100.0

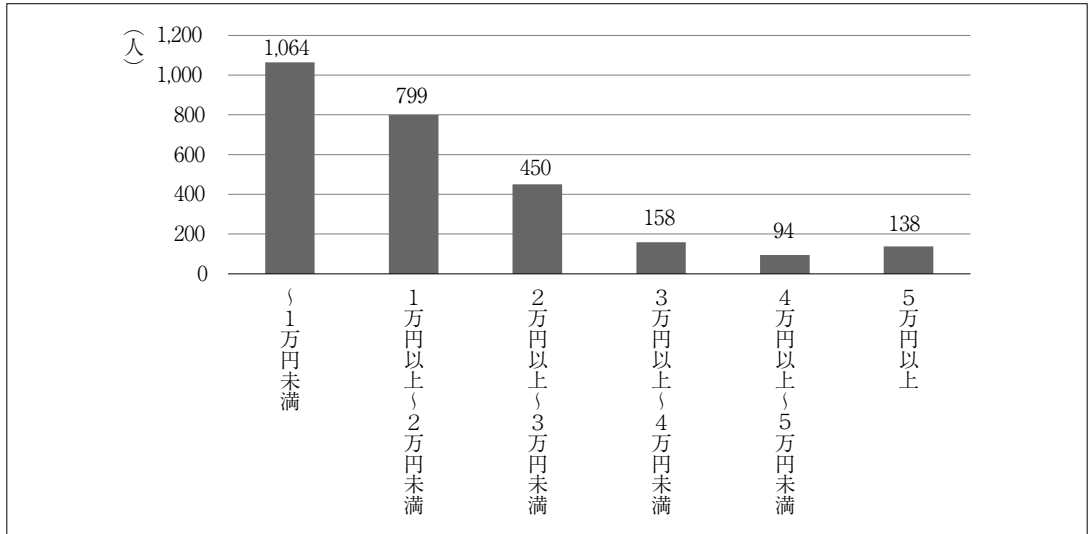


図10 中学生時の教育投資額の分布 (投資を受けている場合のみ。n=2703, 数値は実数)

次に、きょうだい数と中学生時の教育投資額の関連を以下に示す (図11)。

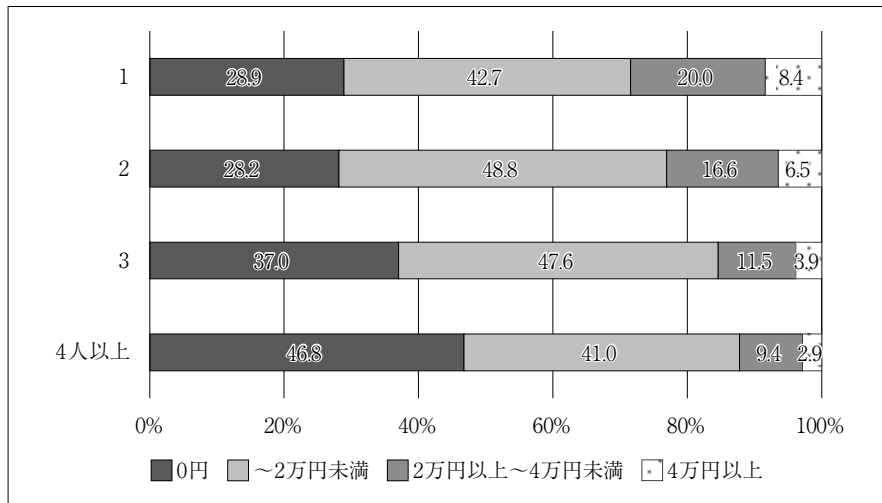


図11 きょうだい数別に見た教育投資額の分布 (n=3924, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある。)

きょうだい数が多い方が、中学生時に教育投資を受けていないあるいは受けていても2万円未満である子どもの比率が高いことがわかる。きょうだい数が増えると、家庭の経済的な資源が希釈されて子どもたちに配分されるという資源希釈仮説 (Blake 1989) を支持する傾向がみられるといえるだろう。

図12では、性別ごとに教育投資額の分布を示した。この結果からわかるのは、男性と女性の間で、

親の中学生時の教育投資額の分布にほとんど違いがないことである。性別の違いは教育達成の差異に大きな影響を及ぼす要因であることがわかっており、男性よりも女性の方が教育達成は低くなる（平尾2008）。それとあわせて、きょうだい構成と教育達成の関連を検討した研究においては、親が女性よりも男性の方に多くの資源を投資することによって男性の教育達成が高くなっているという選択的投資仮説に基づいた議論が展開されている（Becker 1981）。図12は同じ家族内の男女を比較したものではないのでこの結果からすぐに結論を出すことはできないが、男性であっても女性であっても、中学生時点では親の教育投資額には大きな違いが見られない可能性が示唆される。

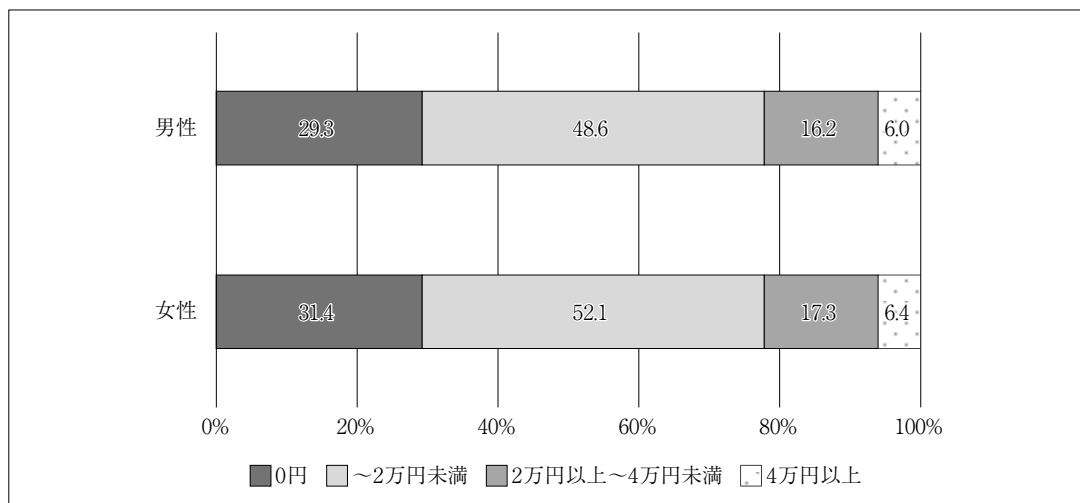


図12 性別ごとにみた教育投資額の分布 (n=3924, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある。)

続いて出生順位と教育投資額の関連を示したのが図13である。遅い出生の子どもほど教育投資額が0円の人の比率が高く、2万円以上の比率が低いことがみてとれる。このことから、遅い生まれの子どもほど教育投資を受けにくい状況に置かれやすいと考えられる。

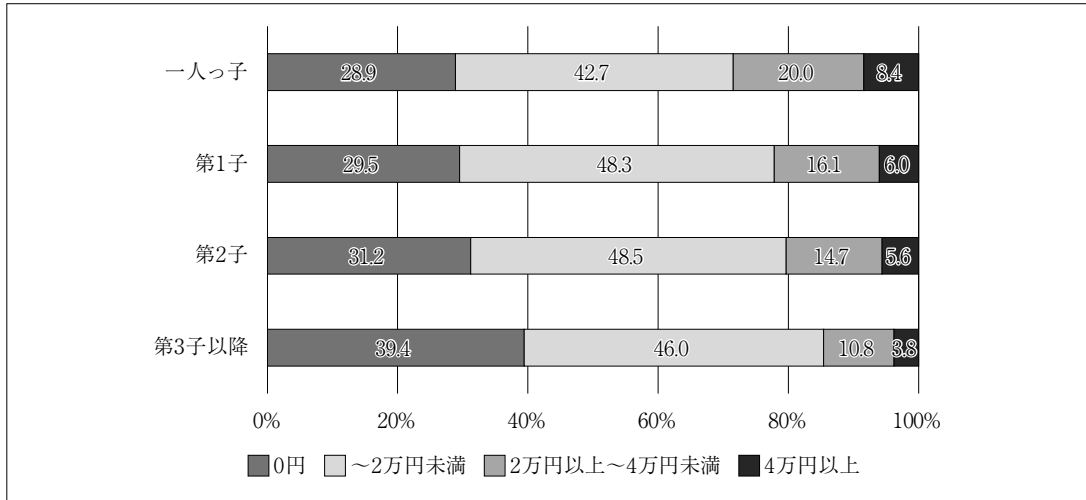


図13 出生順位別にみた教育投資額の分布 (n=3924, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある。)

教育投資額の分布をみるにあたってもう1つ重要な視点は、子どもの出生間隔との関連である。これまでの研究では、子どもの出生間隔が大きくなればなるほど家庭の経済的な資源の回復猶予が与えられることから、出生間隔の大きいきょうだい構成の子どもの方が教育達成は高くなるのではないかとされている(保田2009)。そこで、出生間隔ごとに教育投資額の分布を確認したのが図14である。出生間隔が6年以上の場合を除けば、一貫して出生間隔が大きい場合の方が教育投資を受けていない人の比率は低く、教育投資を多く受けている人の比率が高いことがわかる。だが出生間隔が6年以上の場合には教育投資を受けていない人の割合が多い。他方で2万円以上の教育投資を受けている人の割合にはそこまで大きな差がみられないことから、大きな出生間隔の場合には、資源の回復を待って子どもをもうけて教育投資を行うような家庭と、他方で間隔が大きかったとしても教育投資を行わない、あるいは行えない家庭とが比較的是っきり分かれているのではないかと考えられる。

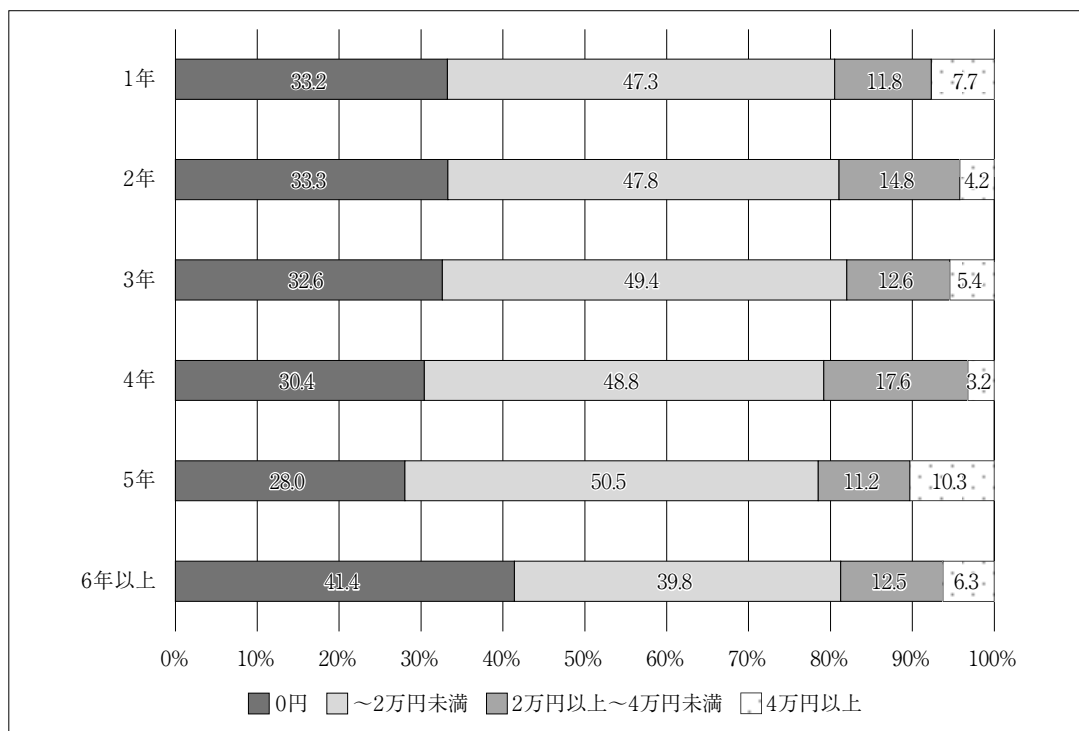


図14 出生間隔別に見た教育投資額の分布 (n=1896, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある。)

### 3-3 きょうだい構成と学歴の関連

本節では、きょうだい構成と学歴の関連についてまとめる。初めに表8には、子どもの学歴の分布を示してある。続く表9には、性別ごとに子どもの学歴の分布を示した。中卒・高卒が全体の16.3%、高等専門学校卒・専門学校卒・短期大学卒が全体の23.9%、四年制・六年制大学卒・大学院卒が58.1%となっている。また、四年制・六年制大学卒業者のうちでは、国立・公立大学を卒業した人が24.0%、私立の大学を卒業した人が76.0%であった。

**表8 子どもの学歴の分布**

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある。)

	度数	(%)
中学校	10	0.3
高等学校	629	16.0
高等専門学校	100	2.6
専門学校・専修学校	518	13.2
短期大学	316	8.1
四年制大学(国立・公立)	434	11.1
四年制大学(私立)	1460	37.2
六年制大学(国立・公立)	44	1.1
六年制大学(私立)	54	1.4
大学院	285	7.3
その他	74	1.9
計	3924	100.0

次に性別ごとの学歴分布をみてみよう。男女ともに、四年制の私立大学を卒業した人の比率が最も高いことがわかる。また、女性に比べて男性は大学院卒の比率が高く、短期大学卒の比率が低い。他方女性においては短期大学卒業者が15.2%と高い比率となっており、専門学校・専修学校卒業者の比率も男性より高くなっている。

**表9 性別ごとにみた子どもの学歴の分布**

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある。)

	男性		女性	
	度数	(%)	度数	(%)
中学校	6	0.3	4	0.2
高等学校	349	17.2	280	14.8
高等専門学校	54	2.7	46	2.4
専門学校・専修学校	242	11.9	276	14.6
短期大学	29	1.4	287	15.2
四年制大学(国立・公立)	220	10.8	214	11.3
四年制大学(私立)	835	41.1	625	33.0
六年制大学(国立・公立)	29	1.4	15	0.8
六年制大学(私立)	25	1.2	29	1.5
大学院	208	10.2	77	4.1
その他	33	1.6	41	2.2
計	2030	100.0	1894	100.0

以下ではきょうだい構成と学歴の関連についてまとめる。まず、きょうだい数と学歴の関連をみたのが図15である。なお、一部のカテゴリをまとめて示してあることに注意されたい。きょうだい数が増えれば増えるほどに、中卒や高卒の人の比率が高くなっていることがわかる。また、四年制・六年制大学の部分に着目してみると、一人っ子のうち国公立大学卒の人の比率が8.8%である一方

で、きょうだいがいる場合の国公立大学卒の人の比率はいずれも10%を超えている。私立大学卒の人の比率が一人っ子で最も高いこともあわせて考えると、きょうだいがいる場合には家計の負担が少しでも減るように国公立大学へ進学する人が多いのかもしれない。

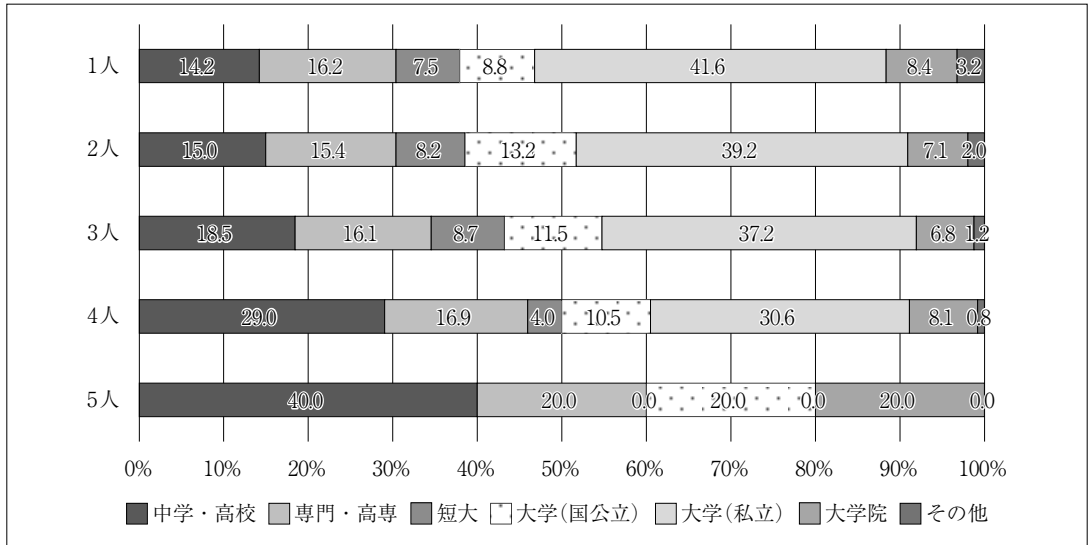


図15 きょうだい数×学歴の分布 (n=3924, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある。)

続いて出生順位と学歴の関連は以下のとおりである(図16)。まず全体的な傾向として、出生順位が遅いほど、学歴が低い人の比率が高くなるのが明らかである。ただ、一人っ子ときょうだいの第1子を比較してみると、一人っ子と第1子の高等教育機関卒の人の比率はほとんど同じであること(一人っ子82.5%, 第1子83.9%)と、四年制・六年制大学卒の人の比率で比較した場合には、一人っ子が50.4%, 第1子が53.8%であり、第1子の方が3%ほどその比率が高くなっていることがわかる。すなわち一人っ子であれば学歴が高くなりやすいかと言うとそうでもなく、わずかな差ではあるがきょうだいのいる第1子の方が、高い学歴を得ている人の比率が高いということが示された。



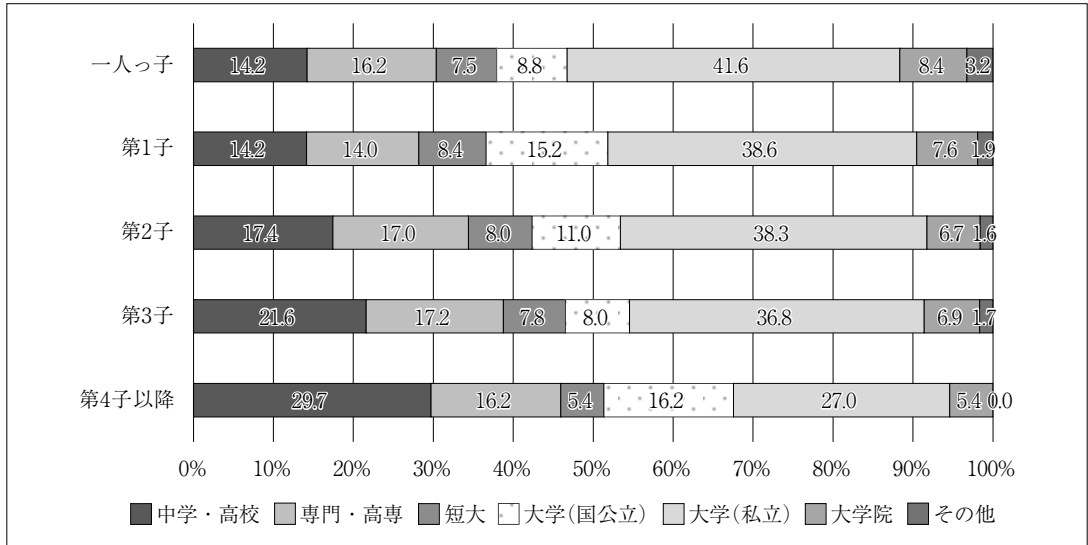


図16 出生順位×学歴の分布 (n=3924, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とまらない場合がある。)

次に、直近の年上きょうだいの出生間隔と学歴とのクロス集計を行い図示した結果が図17である。出生間隔が6年以上の場合を除けば、出生間隔が大きくなればなるほど、高等教育機関卒の人の比率が高くなっていることがみてとれる。また、私立大学卒業の人の比率が特に高くなっているのは出生間隔が4年の場合であった。「家族についてのアンケート」には出生間隔が5年以上のケースが少ないため分析結果の解釈の仕方には十分に注意しなければならないが、出生間隔の大小は子どもの学歴に影響を与える要因たりうると推察される。

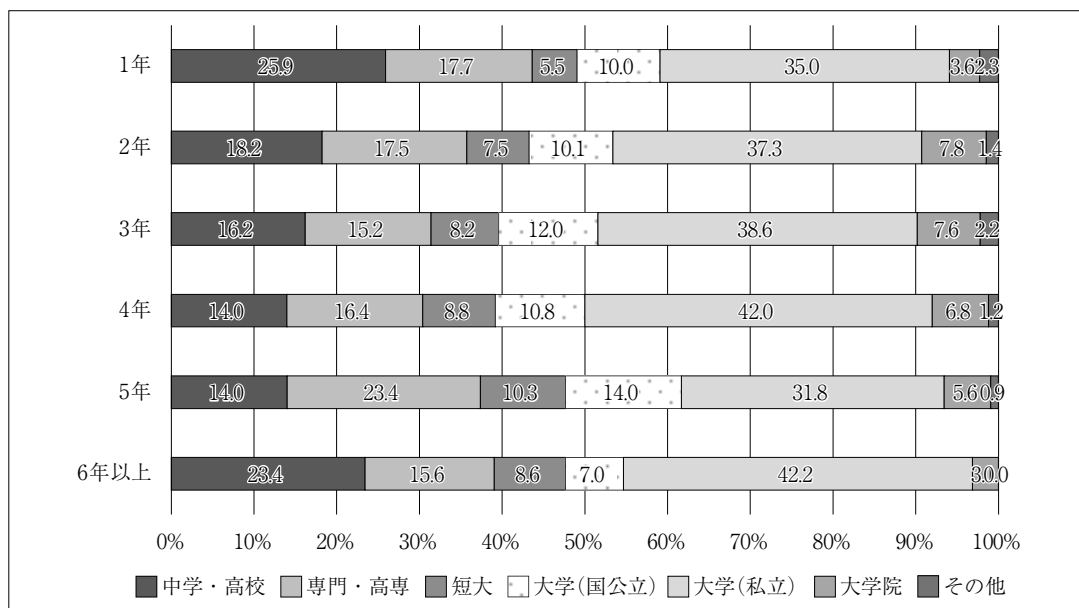


図17 出生間隔×学歴の分布 (n=1896, 数値は%)

(小数第2位を四捨五入しているため、各数値を足すと100.0とならない場合がある。)

#### 4 まとめと今後の課題

本稿では、「家族についてのアンケート」に含まれる情報のうち、母親に関する情報・父親に関する情報、そして子どもに関する情報の一部について概観した。基礎集計の結果から、特に重要だと考えられる点についてまとめていく。

まず、定位家族の経済的な資源量や教育投資額ときょうだい構成の関連について述べる。中学生の時に教育投資を受けていた子どもは全体のうち7割いて、多くの子どもが学校外での学習活動を行っていることがわかった。また、きょうだい数が多くなればなるほど、教育投資を受けていなかったり受けていても金額が低い人の比率が高くなる。このことから、有限である家族の経済的資源を子どもに振り分けるにあたって、子どもの多い家族ではそれぞれの子どもに行き届く資源が希釈され、少なくなっていると考えられる。

加えて、性別ごとに教育投資額の分布を確認したところその差がみられなかったことから、中学生時の教育投資においては、子どもがどちらの性別であったとしても、親がおおよそ同じ金額を投資しているのではないと思われる。中学生時には性別に関係なくほとんどの人が高校受験を控えていることから、受験に向けて塾に通ったり通信教育を受けたりという行動には男女差がないのであろう。だが、最終的な教育達成において男女差があることはこれまでも再三確認されてきた事実であり、中学校卒業以降のどの段階で男女差が生じてくるのか、改めて考える必要があるだろう。

そして、出生順位が遅い子どもの方が教育投資を受けている人の比率が低く、出生間隔が大きい子どもの方が教育投資を受けている人の比率が高くなっていることから、直近の年上きょうだいとの出生間隔が近い子どもたちが、家族の経済的資源を受けにくい現状がうかがえる。子どもの数や

出生のタイミングは、子ども自身ではどうすることもできないものである。よって、親が自分たちの家族構造や子どものきょうだい構成についてどのように考え、行動するかということが、子どもの成長や達成にとって非常に重要な要因であるといえるだろう。

次に、きょうだい構成と学歴の関連については、既存研究から得られている知見を支持するような結果が多く得られた。きょうだい数が増えると学歴が低い人の比率が高くなること、出生順位が遅い子どもの場合に学歴が低い人の比率が高くなること、出生間隔が大きい場合に学歴が高い人の比率が高くなることが、本稿の基礎分析からもみてとれた。また、一人っ子の学歴が必ずしも高いわけではなく、一人っ子ときょうだいの第1子とで学歴の分布にあまり大きな差がないことも確認された。本稿で新たに示唆されたのは、一人っ子ときょうだいがいる人とは、大学に進学する場合の「国公立か私立か」という選択において、意思決定のメカニズムが異なっているのではないかとということである。きょうだいがいる人の場合に国公立大学卒の比率が高いのは、他のきょうだいのことを考慮に入れながら進路を選択しているからではないだろうか。進路選択のメカニズムときょうだい構成の関連については、詳細な分析が求められる。

最後に、残された課題について述べたい。まず、本稿でみたとおり、親の学歴の情報や子どもの数の情報から、分布に偏りが生じている可能性が示唆される。また、インターネット調査であることから、データの妥当性や結果の一般化可能性の点で限界があることは確かである。以上をふまえて、可能な限り適切な補正をデータに施したうえで更なる分析に進む必要があるだろう。それだけでなく、「家族についてのアンケート」は本稿で用いた項目以外に親子関係やきょうだい関係に関する質問項目を多く含んでいる。加えて、地域移動に関する変数や職業に関する情報も得られていることから、本稿で用いた変数とそれらの関連についての検討を行うとともに、多変量解析の各手法を用いて家族構造やきょうだい構成が個人に与える様々な影響に迫っていきたい。

## 【注】

- (1) 日本のデータを用いた研究としては、Lee (2009)、平沢 (2011)、藤原 (2012)、苦米地 (2012)などが挙げられる。
- (2) 実査は株式会社クロス・マーケティングに依頼して行った。
- (3) 調査対象者が中高年層に多くなるのが事前に想定されたため、インターネット調査モニターの子どもの数や年齢等の分布を把握するための調査を2014年3月に実施している。
- (4) 「家族についてのアンケート」は、質問票に先に回答した人からデータが集まる仕組みとなっている。インターネット調査モニターに登録している人のうち、積極的あるいは素早く回答を行う人が多く含まれたデータであることは疑いようもなく、十分に留意しなければならない。
- (5) 以下の図表では、度数の  $N$  と  $n$  を区別して使用している。 $N$  とした場合には、回答者や配偶者およびその家族に特有の家族構造や家族背景の変数であること、すなわち「家族」を1ケースとみなしていることを意味する。他方  $n$  とした場合には、回答者の「子ども」一人ひとりを1ケースとしてみた場合を意味している。したがって、 $N$  の最大値はサンプル・サイズと等しく1995となるが、 $n$  の最大値はデータ内に含まれる子どもの数の合計値と等しく3924となっている。
- (6) 最も新しい1976年から1983年生まれのコホートの数値である。

(7) このデータを参考しているのは、「家族についてのアンケート」データ内に含まれる子どもの全員が既に24歳以上であるためである。逆算するとデータ内の子どもたちは少なくとも2014年時点から9年以上前に中学生であった人々であり、ゆえに教育投資の平均額の参考となるのは、平成17年以前の平均額であると考えられる。「子供の学習費調査」の最も古いデータが平成14年のデータであったことから、本稿ではこのデータを参考とすることにした。

## 【参考文献】

- Becker, G. S., 1981, "A *Treatise on the Family*" Cambridge MA, Harvard University Press.
- Blau, P. M. and O. D. Duncan, 1967, *The American Occupational Structure*. New York: Free Press.
- Blake, J., 1989, "*Family Size and Achievement*" Berkeley, University of California Press.
- 藤原翔, 2012, 「きょうだい構成と地位達成——キョウダイデータに対するマルチレベル分析による検討」『ソシオロジ』57(1): 41-57.
- 平尾桂子, 2008, 「人口変動とジェンダー・家族——女子教育の効用とその変化」『教育社会学研究』82: 89-107.
- 平沢和司, 2011, 「きょうだい構成が教育達成に与える影響について——NFRJ08本人データときょうだいデータを用いて」『第3回家族についての全国調査(NFRJ08)第2次報告書』日本家族社会学会全国家族調査委員会, 4: 21-42.
- , 片瀬一男, 2008, 「きょうだい構成と教育達成」米澤彰純編『2005年SSM調査シリーズ5教育達成の構造』1-17.
- 近藤博之, 1996, 「地位達成と家族——キョウダイの教育達成を中心に」『家族社会学研究』8: 19-31.
- Kuo, H.-H. D., & Hauser, R. M., 1995 "Trends in Family effects on the education of black and white brothers" *Sociology of Education* 68, pp136-160.
- Lee, K. S., 2009, "Competition for Resources: A Reexamination of Sibship Composition Models of Parental Investment." *Journal of Marriage and Family*, 71:263-277.
- Sewell, W. H., A. O. Haller and G. W. Ohlendorf, 1970, "The Educational and Early Occupational Attainment Process: Replication and Revision," *American Sociological Review* 35(6): 1014-27.
- 苔米地なつ帆, 2012, 「教育達成の規定要因としての家族・きょうだい構成——ジェンダー・出生順位・出生間隔の影響を中心に」『社会学年報』41: 103-114.
- 安田三郎, 1971, 『社会移動の研究』東京大学出版会.
- 保田時男, 2009, 「きょうだい内での学歴達成」藤見純子・西野理子編『現代日本人の家族——NFRJからみたその姿』有斐閣ブックス.

## 【参考HP】

- 文部科学省, 2002, 「平成14年度子供の学習費調査」  
(2014年8月29日取得, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/006/03121101/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/006/03121101/003.htm)).

## 【付記】

本稿で用いた「家族についてのアンケート」は、東北大学大学院教育学研究科の研究倫理審査委員会の許可を得て実施した。また、本稿は科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

# Family Structure and Sibling Composition:

## The Analysis of Survey of Family Data

Natsuho TOMABECHI

(Graduate student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of this paper is to overview of the Survey of Family data. Survey of Family is an internet survey and it was conducted in the middle of April. 1995 families and 3924 children in this data. Firstly, the author do an analysis about the relationship between sibling composition and educational investment. Secondly, the author examine the relationship between sibling composition and educational attainment.

The results of analysis, number of children has negative effect on educational investment by parents. In addition, gender doesn't affect parental investment when children were junior high-school student. Age spacing between siblings has positive effect on parental investment. If there are widely age spacing between siblings, younger sibling tends to get more educational investment. Moreover, people who has siblings tends to attend national university. The mechanism about choice of university which he/she goes on to may be different by sibling composition.

Keywords : family structure, sibling composition, internet survey

